みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

# 人間の見方



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-03-14<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 宇田川, 妙子<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10502/00008560 |

# 5. 人間の見方

宇田川妙子

**本章のねらい**：文化人類学では，人はそれぞれの社会文化によって多様であるという見方をしているが，この見方は，1つの社会文化の中でも通用する。たとえば，1つの社会の中でも，民族が異なることは少なくないし，地域や階層による差もある。そして，男性と女性は，身体的に異なっているだけでなく，ものの見方や知識のあり方が違うことも多々あるだろう。同様に年齢や世代によっても人は異なる。

本章は，このように人は多様であるという立場から，その多様性の一端を，男性と女性という性の差異に着目しながら見ていくことにする。また，男性と女性という問題は，家族という領域に深く関わっているため，今回の議論は，家族や性という問題にも展開していく。

**<キーワード>**　ジェンダー，セクシャリティ，性別分業，家族，多様性



## 1．男性と女性

人は民族や文化によって多様であるという考え方は，当たり前であると思われている一方で，男性や女性という差はしばしば，文化による違いよりも身体的な違いと見なされてきた。しかも，そうした男性と女性の違いさえも，それが余りにも当然と思われてきたせいか，最近まで，本格的な議論の対象とされてこなかった。このため人類学者も，ある社会文化を研究する際には，その社会の正式な成員と見なされる男性だけ

を対象とし，女性たちの話を聞こうとすることすら少なかった。こうした傾向を踏まえて，女性を「沈黙させられた集団（muted group）」という言葉で表現した研究者もいる。

しかしこの傾向は，フェミニズムの影響などにより大きく変わってきている。いまや，男性も女性も，生まれながらに男性・女性なのではなく，社会文化の中で作られてきたという考え方が主流になっており，そのきっかけとなったのが，ジェンダーという概念の導入である。

ゆえに，ここで性別に関する考え方を簡単にまとめておくと，現在，性とは，①セックス：身体的，生物学的な性別，②ジェンダー：社会文化的に作られた性別，③セクシュアリティ：性的指向（誰を好きになるか），の3つの側面に分けて，その関連の中で考えることが多くなっている。ただし，この3者の関係は非常に複雑で，突き詰めていくと3つに分けること自体に問題が出てくる。しかし本章では，紙幅の都合もあり，とりあえずこの分類を踏襲するが，その場合でもまず浮かび上がってくるのは，通常男性や女性とされている性別とは，この組み合わせの一部でしかないという点である。



実際，この3つの側面にそれぞれ男女の区別があるとすると，組み合わせは8通りになる。そのうち，通常男性と言われる性とは，①身体が男性で，②その社会文化の中で男性として成長し，③女性が好きな人だが，中には，①身体が男性でも，②女性的な服装や振る舞いを好んだり，③男性が好きになったりする人もいるし，その組み合わせは多岐にわたる。確かにこれらの性は，通常考えられている男性や女性に比べると非常に少数かもしれない。しかしながら，そうした2つ以外の性のあり方が，たとえ人数的に少なくとも世界中で報告されていることを考えるならば，私たちの性は，いわゆる男女の2つに納まるものではないということをまず十分に認識しておく必要がある。

## 2. 多様な性別分業

では最初に，このいわゆる男女について，詳しく見ていくことにしよう。

男性と女性とは，一般的に，社会における役割や機能が異なっていると考えられている。つまり，男はソト（公的領域）で政治や経済に関わる仕事をし，女はウチ（家内領域）で家事・育児などをするという性別分業である。その背後には，女性は身体的に出産機能をもっているため，それに関係する仕事が女性の役割であるという考え方があると思われる。さらには，男性は論理的で，家族を守るために攻撃的にもなるのに対して，女性は感情的で，家族のために慈愛に満ちた性格になるという，性格的な違い，らしさの違いにつながることも少なくない。

しかし，人類学的な調査が進んでいくと，こうした性別分業のあり方とは異なる社会文化もあることがわかってきた。たとえば，東南アジアの各地では，男性よりも女性が農作業などの仕事に従事しており，経済的にも女性の収入が多い社会も少なくない。また，ニューギニア高地の諸社会ではブタが重要な財産であり，儀礼や宴会では客に振る舞われて男性たちの名誉に直結しているが，その世話は女性によって行われており，女性たちの労働量は非常に大きくなっている。一方，男性たちは，男性しか入れない儀礼小屋で儀礼用の仮面や道具を作ったり，社交をしたりして日々を過ごしていると言う。女性が家内領域だけに携わるという男女の分業は，けっして普遍的な現象ではないのである。

ただし，これらの社会にあっても，多くの場合，女性の家庭外での仕事や収入が彼女の社会的な地位には直結しないという点にも注意したい。性別分業は，男女間の力関係という問題と関連させていくと，さらに複雑な様相を呈してくる。

たとえば，母系社会の事例を見ていこう。母系社会とは財産が母親から娘へと相続され，女性が財産を所有している社会である。ゆえに父系社会に比べると女性の発言権は強いと言われるが，だからといって女性の地位が男性より高いわけではない。実際，たいていの母系社会では，女性が土地などの財産を処分しようとする際には，彼女の母方の男性親族，つまり男兄弟や母方オジなどの許可が必要とされる。女性は財産の所有権をもってはいても，その実質的な管理権は男性にあるのである。

また，たとえ性別分業があっても，男女の関係が平等な社会や，性別分業そのものが非常に曖昧な社会もある。アフリカのカラハリ砂漠のサンという社会では，女性は採集，男性は狩猟という明確な分業があるが，女性が採集するメロンなどの植物は，水の確保が最重要事項の１つである彼らの生活においては，男性が捕らえる動物の肉などと同等，あるいはそれ以上の重要性があるためか，男女は比較的対等であると報告されている。そもそも狩猟採集社会では，財産がほとんどなく，男女の差のみならず皆の平等性が高いという背景もある。



そして，こうした狩猟採集社会の中には，性別分業そのものが，それほど明確ではない社会もあり，その一例が，カナダ極北に住むカショー・ゴティネ（かつてヘヤー・インディアンとも呼ばれていた）という北米先住民の社会である。彼らの生活は，主に冬期に行われる狩猟に依存している。その際，ムースやカリブなどの大動物の狩猟は比較的男性が行い，女性はウサギなどの小動物の狩猟をするという傾向がないわけではないが，その区別は確固としたものではないと言う。また，日常生活においても，動物の皮を剥ぐ作業は男で，皮なめしは女，カヌーやソリなどの修繕は男で，スリッパや靴などの縫製は女という，若干の分業傾向はあるものの，やはり曖昧である（表５－１）。どちらがどちらの仕事をしても，男らしくない，女らしくないなどと非難はされず，男女の区

表5-1　カショー・ゴティネの日常生活の作業分担
（原ひろ子『ヘアー・インディアンとその世界』より）

| 「仕事」である度合いと作業の担当者 ＼ 作業 | 「仕事」である度合い | 男女どちらでもよい | どちらかと言えば女 | とちらかと言えば男 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| ムース、カリブの毛皮を剥ぐ | ◎ | | | ○ | どうしても男 |
| 交易用毛皮を剥ぐ | ◎ | | | ○ | |
| 交易用毛皮をなめす | ◎ | ○ | | | |
| ムース、カリブの毛皮をなめす | ◎ | | ○ | | 男のなかに上手な人もいる |
| 交易用の毛皮を店で交易する | ◎ | ○ | | ○ | |
| 毛皮のモカシンを店で交易する | ◎ | | ○ | | |
| カヌーを操縦する | ◎ | ○ | | ○ | |
| 犬ぞりを操縦する | ◎ | ○ | | | |
| 干魚を作る | ◎ | ○ | ○ | | |
| 魚網を修理する | ◎ | ○ | | ○ | |
| カヌーを修理する | ◎ | ○ | | ○ | |
| ソリを修理する | ◎ | ○ | | ○ | |
| モーターを修理する | ◎ | ○ | | ○ | |
| キャンプから交易所への買物 | ∘ | ○ | | ○ | |
| テント設営、閉鎖 | ◎ | ○ | | | |
| 床にカナダトウヒの枝を敷く | ◎ | ○ | ○ | | |
| テントに防寒措置をする | ○ | ○ | | | |
| 水くみ（冬は氷運び） | ○ | ○ | ○ | | 主に若者男女 |
| 冬の氷とかし | ∘ | ○ | | | |
| 薪の伐り出し | ◎ | ○ | | ○ | |
| 薪割り | ◎ | ○ | | | 子どももする |
| 薪をテントに運ぶ | ○ | ○ | | | 主に子ども |
| ストーブに薪をつぐ | ∘ | ○ | | | |
| 寝袋をひろげ、たたむ | 着脱衣と同じ | ○ | | | 自分のをする |
| 肉、魚の調理 | ∘ | ○ | | | ほとんど味付けしない |
| バノック（かたい厚いホットケーキ）焼き | ∘ | ○ | | | 小麦粉、ラード、ベーキングパウダー |
| 皿洗い | ○ | ○ | ○ | | |
| スリッパ、くつ、手袋縫製（皮製） | ◎ | | ○ | | 男の中に上手な人もいる |
| パーカ縫製（厚地ウール） | ◎ | | ○ | | |
| ボタンつけ、ほころびのつくろい | ○ | ○ | | | |
| 洗濯 | ○ | ○ | ○ | | |
| 食料品の買い物（交易所にいるとき） | ∘ | ○ | | | 非日常的 |
| どぶろくの仕込み | 「遊び」 | ○ | | ○ | 非日常的 |
| 丸木小屋の掃除 | ◎ | ○ | ○ | | 非日常的 |
| 子守 | 「遊び」 | ○ | | | 6歳以上の子どももする |
| 嬰児の世話 | ∘ | ○ | ○ | | |

別よりも，上手なものがやればいいという考え方が優先しているのである。そもそもカショー・ゴティネの社会では，1960年代初頭に調査した原ひろ子氏によると，その厳しい生活環境もあいまって，本質的に，人は1人で生きるという考え方が共有されていると言う。そうした社会にあっては，性別分業という考え方そのものが発達しないと言うこともできるかもしれない。

## 3．多様性という考え方

このように男性と女性の役割やあり方は，社会文化によってきわめて多様である。確かに，男女の役割分担や区分がまったく存在しない社会文化はないし，どの社会文化でも，女性は身体的に出産機能をもっている。しかし，女性の役割や性格は，その機能に限定されているわけではないのである。



そして，1つの社会文化の中でも，女性はもちろん男性も，年齢や立場によって多様である。たとえば，日本でもかつて，女性は結婚して夫の「イエ」に入ると，妻および嫁として，夫や夫の親（特に母親）の支配下に置かれ地位が低かったが，自身が姑の立場になると，それなりに力を発揮することができた。妻・嫁としての地位は低いが，母・姑としての地位は相対的に高いということである。またニューギニア高地では，女性は出産を終え閉経する時期になると男性的に扱われ，それまで立ち入ることのできなかった儀礼小屋に入ることも可能となる社会もある。女性は一生，同じ女性なのではなく，年齢などによっても位置付けや地位が変化していくのである。

とはいえ現在でも，「男性はソト，女性はウチ」という画一的な考え方は根強い。人類学でも，以上のような女性たちの家庭外での活動や多様性が論じられるようになったのは，ここ数十年のことである。確かに

1930年代，マーガレット・ミードが男女の役割は文化社会によって異なるという指摘をしている。しかし，その考え方が浸透し，性別の問題が人類学の分野で本格的に調査研究されるようになったのは，フェミニズムが興隆した1970年代以降である。それまでは，男女の区別は生まれながらのものという生物学的決定論が主流であった。では，その根強さの理由とは，何だったのか。

## 4.「近代家族」

ここで若干人類学を離れて「近代家族」という議論を見てみよう。そこでは，「男性はソト，女性はウチ」という男女観は，実は近代の産物であるという興味深い指摘がなされている。

その議論によると，近代の変化としてまず考えられることは，産業革命以降，工場での労働が増えるに伴って，職場と住居が分離するようになったということである。これは公的領域と家内領域の分離を意味するが，同時に，それぞれが男性と女性の仕事としても分離した。それ以前は，農村の生活を見ればわかるように，もちろん分業傾向はあったが，女性も畑仕事をしたし，男性も薪割りなどの家の仕事をしていた。しかし近代になると，生産活動はもっぱら男性が家の外で行い，女性は家の中で「主婦」になっていったのである。

もう１つの変化は，子ども中心主義的な考え方である。それまで子どもはせいぜい大人のミニチュアでしかなかったが，この頃，子どもを大事に育てることに関心が集まり出した。これは，近代になって（近代的な意味での）国家と市場が生まれ，良い国民と良い労働者の育成が重視されるようになってきたためである。そしてその育成の手段として，学校とともに注目されたのが家族である。家族は，以前は畑仕事などの生産活動を共同で行う場でもあったのに，次第に，子どもを生み育てる再

生産の場に特化していった。その結果ここに，子どもと母親と父親という核家族形態を基本とし，子育てを中心とする家族団らんの場，互いに暖かな愛情で結ばれるべき家族という，現在にまで通ずる情緒的な家族像が生まれることになる。これが「近代家族」である。

さて，こうして見ると，今私たちが当たり前と思っている家族とは，自然なように見えるが，実は，近代以降，人が国民および労働力として作り直されるに伴って，妊娠・出産，つまり生殖がことさら強調される過程で再編されてきたものであると言えるだろう。そしてこのことは，男女の区別も，ことさら生殖を基準にして付けられるようになり，女性の場合，その役割は本質的に出産機能によって規定されるようになったことを意味する。つまり，母性が強調され，家の中での仕事こそが女性の本来の役割であると期待されるようになったのである。



とするならば，たとえ出産が，女性の身体的機能であることは変わりなくとも，その点をそれほど強調しない社会文化もあるはずであり，そうした社会にあっては，家族や男女のあり方も，私たちのそれとは大きく違ってくるのは当然である。ここで，先に述べたカショー・ゴティネの事例に戻ってみよう。そこでは，性別分業のみならず，家族のあり方も，私たちのそれとは大きく違っている。

## 5. カショー・ゴティネの家族

彼らは，先にも述べたように狩猟採集民としてムースやウサギなどの動物を追って移動生活をしている。短い夏の間は，比較的皆が集まって住んでいるが，冬になり動物たちの活動期になると，それぞれ分かれてキャンプ生活に入る。そして，１つのキャンプを拠点にしつつも，さらに小集団のテントに分かれて動物を追うという生活になる。

ところで，このテントを同じくする者たちは数人から10人ほどで構成

され，これが彼らの狩猟生活の基本的な単位になるが，原ひろ子氏は，これを「テント仲間」という言葉で表現している。というのも，その構成がいわゆる家族ではなく，きわめて多様だからである。

もちろん，先にも紹介したように大動物の狩猟や皮はぎは男の仕事，小動物や皮なめしは女の仕事という傾向があるので，男女を１組にすると生産性が高くなるため，この組み合わせは比較的多いと言う。しかし，この男女の組み合わせが夫婦ではないこともしばしばであり，そもそも夫婦であっても，その関係は生涯続くとは期待されておらず，相手は頻繁に変わる。また，テント仲間が，同性同士，それも親族関係にはない友人同士という場合も珍しくない。すでに述べたように性別役割分担がほとんどなく，各人がそれぞれ得意な技術・役割をもっているからである。そして，テント仲間もキャンプの構成も離合集散が激しく，気が合わなければ，すぐに別の仲間やキャンプに加わるという傾向もある。このため，この社会で生きていくためには，家族や親族の関係よりも，むしろ，異性同性を問わず気の合う仲間や友人をもっていることが重要になってくるとも言えるだろう。

また，子どもに関してだが，カショー・ゴティネでは子どもを生むことよりも育てることに重点が置かれていると，原ひろ子氏は指摘する。というのも，養子関係が非常に広く見られ，自分が生んだ子どもを自分で育てるというよりも，その時々の状況によって養子に出す一方で，他人の子どもを養子にして育てたり，一時的な預け合いも頻繁に見られるからである。これは，女性が出産機能によってその役割を限定されないことを意味する。たとえ不妊でも高齢でも子育ては可能だし，それゆえ子育ては女性に限定されず，男性も子どもの世話をよくしていると言う。

こうしてみると，カショー・ゴティネは，私たちのように親子・夫婦（という生殖を中心に結ばれた近親たち）が常に一緒に暮らすことを重

視する社会とは大きく異なっている。もちろん彼らの社会においても，自分の父親や母親，兄弟・姉妹，子どもという関係は，たとえ一緒に住んでいなくとも明確に認識されており，この範囲では，近親相姦の禁止や遺体埋葬に関わるタブー*1が厳格に守られている。それは一見，私たちの家族の範囲に似ているかもしれない。しかしこの範囲は，生活を共にするというよりも，あくまでも埋葬や性的なタブーによって結ばれた関係であり，一方，実際のテント仲間やキャンプという日常生活においては，他の親族や友人との関係も重要になっているのである。

## 6．性の多様性

このほかにも，たとえば夫婦が一緒に住まない家族や，近親以外の人が同居している家族など，世界にはさまざまな形の家族が存在する。私たちは，研究者も含めて，「近代家族」的なあり方にあまりにも慣れ，当然視するきらいがあった。しかし，それは先に見たように，生殖にこだわっているがゆえに夫婦や親子の関係をことさら重視した家族である。私たちは，そのことを十分に認識しながら，これら他の家族の多様性を適切に考察していく必要があるだろう。

そして同様のことは，男性と女性という問題についても言える。現代社会における男女も，生殖という機能を中心に差異化されてきたわけだが，そうした男女のあり方が，性の複雑さから見ると一部でしかないことは，本章の第1節でも指摘した。しかし近代社会では，生殖にこだわるあまり，生殖可能な女性と男性という異性間の関係（異性愛）こそが正常であり，他方，同性同士の関係，すなわち同性愛は異常や病気とされ，時には犯罪とすら見なされていた。

実際，他の社会を見てみると，同性愛的なセクシュアリティのほかにも，身体的にはたとえば男性であるのに女性的な振る舞いや役割をしよ



＊1　この範囲の人々（原ひろ子氏は「身うち」と表現している）の間では互いに死後の遺体の処理や墓堀を禁ずるタブーがある。また，身うちの埋葬をしてくれた人びととは，顔を合わせたり口をきくことを避けるタブーの関係になると言う。

うとするトランスジェンダー，身体も別な性に変えようとするトランスセクシュアルなど，異性愛的な男女以外の性のあり方は世界中に見られる。人類学では，「第三の性」*2という言葉を用いて，これら多様な性の存在を比較的早くから指摘してきた。インドのヒジュラや，北米先住民のベルダーシュ*3と呼ばれていた人たちが，その一例だが，他の地域にも多く存在する。

確かに，そうした人びとは人数的には少ないし，男女双方の知識や力を持っている両義的な存在と見なされて，宗教的な力を持つ者として尊敬の対象になっていた社会がある一方で，差別される場合もあった。しかしその場合でも，近代は，そうした社会以上に，異性愛以外の性に対する強い嫌悪感や差別を発達させてきた。ゆえに「第三の性」的な性のあり方は，白人による植民地化以降，すなわち近代化以降，差別が激しくなったという報告もある。

実は日本でも，明治時代の前半くらいまでは，特に男性同士の同性愛的行為がよく見られていたと言われている。たとえば1909（明治42）年出版の森鷗外の『ヰタ・セクスアリス』には，「硬派」という言葉で当時の男子学生の間に同性愛な行為があったことが言及されている。この小説は，森鷗外自身の学生時代の性体験を下敷きに書かれていると言われ，すぐに発売禁止になるが，興味深いのは，その処分理由が，いわゆる異性不純交遊に関する記述であって，「硬派」の記述は問題にならなかったという点である。この時期，他の小説などにも男性が男性に思い



＊2　この「第三の性」という言葉は，通常言われている異性愛的な男女の2項を前提とし，それ以外の多様な性を一括りにしているため，2項的な男女観をさらに再生産しかねない言葉であるとして，現在では使用されなくなっている。その代わり，近年クィア（queer）という言葉で多様な性のあり方を指し示す試みも見られるが，これも定着したとは言いがたい。そもそも性に関しては，前出のトランスジェンダーやトランスセクシュアルという言葉の定義もいまださまざまな問題をはらんでいるように，それをめぐる言葉自体が，その多様な実態や歴史的な含意の複雑さを背景に，今後も変遷し議論の的になるであろうことを注意しておきたい。

＊3　ベルダーシュとは，同性愛行為をする男性，とくに受身的な行為をする若年男性を意味するフランス語に由来する言葉で，蔑称として使われてきた。ゆえに現在では，彼／女たち自身が，新たにツー・スピリット（two-spirit）という自称を作ろうとしている運動もある。

を寄せるという記述が少なくない。日本社会においても，近代化が定着する以前は，同性愛や他の性の形は今ほど嫌われておらず，性のあり方はもっと多様だったのである。

## 7. 近代化とグローバル化

さて，このように世界のさまざまな社会文化を見ていくだけでなく，自分たちの社会についても歴史的に振り返ってみると，私たちの性も家族のあり方も，実は非常に多様であることが明らかになってきたに違いない。そして現在では，フェミニズムなどの影響によって男女のあり方も柔軟になり，家族に関しては，特に先進国を中心に，同性愛者の家族など，新たな家族の形を模索する動きも出ており，生殖という身体機能をことさら重視する近代的なモデルは崩れる方向にある。



しかしながら，こうした多様性は，実は近年，消えつつあるという観測もできることを最後に触れておきたい。世界的な規模で見ると多様化の一方で，先進国的な画一化の流れも確実に存在するのである。

たとえば，先述のカショー・ゴティネの状況は，1960年代初頭のものだが，その頃すでに近代化は始まっており，白人たちによる開発事業などが行われていた。これらの事業に雇われるのは，やはり男性であり，こうして性の分業化が始まるとともに，現金収入が生活の中心になってくると，男女の力の格差も広がり始めたという。このほかにも，近代西洋的な政治経済構造や生活スタイルの浸透に伴って，核家族化したり男女の分業が明確化したりする事例は各地で見られる。

そしてこの傾向は，近年のグローバル化の過程でさらに強まっている。たとえば，近年では「移民の女性化」という言葉が使われるほど，世界的に女性移民が多くなっているが，その背景には，先進国の女性たちが社会進出をしていく一方で，彼女たちが行っていた家事労働やケア労働

が，移民の女性たちによって肩代わりされているという実態がある。この状況は，先進国の少子高齢化によってさらに拍車がかけられており，これは地球規模の性別分業化であるとも言えるだろう。確かに，移民女性たちにとって，これらの労働は重要な収入源である。しかし，こうした国際規模の性別分業化には，発展途上国の，しかも相対的に貧困な層の，女性を直撃するという具合に，いわゆる弱者をさらに弱者化する構造があることも忘れてはならない。

現在私たちは，グローバル化がいっそう進む中，世界中の人たちと直接的にも間接的にもますます複雑に関わりながら生活をするようになってきている。とするならば，なおさら，自分たちだけが当たり前だと思っている人間観にとらわれることなく，多様性とその変化の可能性を尊重しながら生活していくことが，必要となっているに違いない。そして人類学の見方とは，そうした多様性を見いだす方法の１つでもある。本章では，性や家族という問題を通してその一端を学んできたが，他の側面についても，人の多様性とその意義について，さらにそれぞれが考えていくことを期待したい。



**●参考文献**

• 落合恵美子『近代家族の曲がり角』角川書店，2000
• 窪田幸子・八木祐子 編『社会変容と女性』ナカニシヤ出版，1999
• 田中雅一・中谷文美 編『ジェンダーで学ぶ文化人類学』世界思想社，2005
• 原ひろ子『ヘヤー・インディアンとその世界』平凡社，1989
• 原ひろ子 編『家族の文化誌』弘文堂，1986